



# 越中万葉集

題字 中尾哲雄

1



万葉集を編纂した大伴家持は  
 天平十八年(七四六年)から五年間、越中の国守を務めた。  
 万葉集の四五二六首のうち、家持の歌は四七三首を占めているが、  
 そのうちの二三三首は越中時代に詠んだものである。  
 また、その他の作者を含めると越中万葉歌は三三七首と多く、  
 越中の古代を知るうえでかけがえのない史料となっている。



二上山の大伴家持像



勝興寺境内の歌碑  
 現在の勝興寺(高岡市伏木古国府)の場所には越中の国庁があり、  
 寺井の跡と伝えられる井戸も残る。

ものふの  
 八十娘子らが  
 汲みまがふ  
 寺井の上の  
 堅香子の花

大伴家持

揮毫 江幡 春濤(日展会友/毎日書道展審査委員)

ものふの 八十娘子らが 汲みまがふ  
 寺井の上の 堅香子の花  
 大伴家持(巻十九・四四三)

「歌恋 たくさんの乙女たちが入り乱れて水を汲んでいる  
 寺井のほとりには群がて咲いているかたかごの花。」



堅香子(かたかご)  
 堅香子はカタクリのこと。  
 春に咲くユリ科の可憐な  
 花で、万葉集には唯一  
 この歌にだけ登場する。